

「Endoscopic Diagnosis in Gastroenterology」

編集 春日井達造 愛知県がんセンター副院長

山口大学教授

竹 本 忠 良

まず、吉本隆明の「書物の解体学」(中央公論社、1975)の「夢」から一文を引用しよう。それには、“ある書物が、どの程度の出来ばえなのかを知る手っ取りばやい方法は、ひとつである。じぶんが、比較的よく知っている項目を、書物からいきなり探してみ、なにが言えているかを測ってみる。そういう項目で、ただ他人の解釈の受けうりしか発見できなかったり、ただのひけらかしだったり、項目に淫しているだけだったりしたら、他のすべての項目について駄目だと思ってよい。もちろん、的を外れる可能性もあるが、まず、最良の判断の仕方のひとつだ”とある。

吉本のあたえている書評指針は、私にも大変参考になっていて、ある本を買うか買わないか迷うとき、利用させてもらっている。また、書評を依頼されたときにも、その“伝”

で、書評する appetite がでないときには、さっさと断わっている。

このたび、春日井達造博士編集の「Endoscopic Diagnosis in Gastroenterology」は、大変美事な本である。腹腔鏡をのぞいた消化器内視鏡学の現状を、じつにきれいな写真をもって、素直にのみこませてくれる。食道から始まって、胃、十二指腸、胆・膵、そして大腸と、掲載された症例が生き生きと、内視鏡で視ることの重要性を教えてくれる。

それに、解説もくどくどしくなくて、つまり簡明である。こういう立派な消化器内視鏡の本が図譜として出版されたことを、同学の士として、心から喜んでいる。カラーの出来ばえを、私も分担執筆者になっている R. Ottenjann と M. Classen 編集の「Gastroenterologische Endoskopie, Lehrbuch und Atlas」(Enke)と比較してみると、格段の相違である。

分担執筆者は遠藤光夫(東京女子医大)、春日井達造(愛知県がんセンター)、川井啓市(京都府立医大)、小林世美(愛知県がんセンター)、中島正継(京都府立医大)、小越 和栄(新潟 がんセンター)と、いずれも学会にあまりにも知れわたった俊英ぞろいである。

ただ、日本の書評習慣に悪乗りして、若干文句を言わせていただくとすれば、せっかくの美麗なカラー図譜の説明をもっと詳しくしてもらいたかったことである。そのほうが、これから消化器内視鏡を勉強し始める外国の初学者に親切であったように思う。

もう一つ、それこそ、吉本隆明流であるが、慢性胃炎の症例などをみて、説明に疑問がないわけではない。Chronic hyperplastic gastritis とあるのは、腸上皮化生 と思えるし、ここで色素内視鏡の図でも欲しいところである。Erosive gastritis の hemorrhagic erosion のシェーマにも、周辺隆起を入れてもらえば、もっと親切な本になったように思う。もとより、これらのことは、ほんの“瑕疵”にすぎない。暴言多謝。

B 5 判 304 頁 図 168 写真 191
原色図 288 1982 ￥17,000 ㊦ 350

医学書院 刊